



月刊バイブル（世界のベストセラー、聖書のトリビア）

第5号

発行:レムナントキリスト教会

価格:100円（送料込みで200円）

〔目次〕

- ◎聖書からのメッセージ:ことばは神である
- ◎高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り
- ◎箴言から学ぼう!:神さまは教育されるお方
- ◎聖書の視点から「死後」について考える:永遠の苦しみのことを思うと・・・
- ◎キリストを信じた体験談:神さまからなぐさめを得た
- ◎聖書に関する偉人のことば:アーサー・ホリー・コンプトン
- ◎ご案内

<聖書からのメッセージ > ことばは神である

〔聖書箇所〕ヨハネの福音書1:1
1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった(ことばは神である)。

聖書を読む時に、よく分かることがあります。それは、聖書は神のことばに関して特別な意味合いがあると、語っていることです。このテキストでは、何と「**ことばは神である**」とまで語られています。今回はこのことを見ていきたいと思えます。ことばが神である、などということは、聞いたことがないかも知れませんが、何のことやイメージが掴みづらいかもしれませんが、何しろそのように語られているので、このことを少し考えて見ましょう。たとえばカトリックの教会堂では、マリヤの像やキリストの像が飾られています。それらの像を拝むべきか?神であると思うべきか?と言うと、拝むべきでも神

だと思ふべきでもありません。なぜなら聖書に、「像は神である」とは書いていないからです。また、ギリシャ正教では、イコンといって聖画像を何か特別に考えているようですが、しかし間違えてもこの画像を神などと思ふべきではありません。なぜなら聖書には「イコンは神である」とは書いてないからです。

しかし逆に聖書のことばに対して「この聖書のことばは、神御自身だ」と言う時に、これは間違えているか?と言うと、じつは正しいのです。なぜなら聖書自身が、「**ことばは神である**」と明言しているからです。ですので私たちが聖書のことばに面する、対する時に、良くも悪くも真剣に対するべきだと、私たちは思っています。なぜなら、「**ことばは神**」なのですから、この聖書のことばにどう向き合うかは、私たちが神にどう向き合うか?どう対応するのか?に通じるからなのです。以前書きましたように、聖書はいわば神御自身によって書かれた世界で唯一の本

ことばは神である

です。そしてここでは、「ことばは神である」とまで言われているので、もし私たちが神のことを真に知ろうと志すなら、この聖書を通して神を知る、ということが正しい方法なのです。

戦前の日本では、天皇陛下が神格化されました。陛下の写真は御真影として大切に扱われたものです。ご真影を粗末に扱うものは天皇への尊敬の念が足りないとして非難されたものです。似たような意味合いで、神はそのことばに関して、「ことばは神である」とまで言われたので、このことば、聖書のことばに敬意や注意を払うことは大事なことだと思われまます。私たちがこの聖書のことばを尊重することは、他でもない見えない神御自身を尊重することに通じるからです。

聖書はたった一冊、唯一神御自身が著者である、と認めた本なのです。たった一冊の本で神のことが分かるのか？もっと沢山の本が必要なのでは？と人間としては思うかも知れませんが、神御自身がそう言われているなら、そうなのです。こんな風に考えればこのことが分かるでしょうか。家を設計する時、どの部屋にどれだけの数の照明が必要なのか、設計者は頭を悩ますわけです。寝室に一つ、台所にも一つ、さらに風呂場にも必要、そしてトイレにも1つ、として、一軒の家に結構な数の照明が必要となってきます。

さて、一軒の家でさえ、こうなるのですから、世界中の全ての人に必要な照明の数となれば、いったいどれほどの数が必要なのか？大変な数が必要に思えます。さて、これは人間の照明問題の解決に関する話ですが、しかし神がこの問題、世界中の人々を照らす照明という問題を解決するとき、もっと少ない数で解決をされます。

神のこの問題を解決する方法は簡単です。世界中の昼を照らす照明として、たった一つの照明、太陽を作られたのです。たった一つの照明、太陽がアメリカでもアジアでもヨーロッパでも全ての地域の全ての人を照らします。太陽は動かないのですが、地球のほうで動き、1年365日移動し、さらに24時間でくるくと自転するので、世界中の人をこの太陽で照らすこと

ができるのです。とても合理的で知恵に満ちた解決方法です。

世界中の人を照らす照明をどう用意するか？この問題に関して神はたった一つの照明、太陽を持って解決しました。これ以上はない、というほど、最良の解決方法です。同じ意味合いで、世界中の人が神を知るための方法として、神はたった一冊の本、聖書をもって回答されています。であるがゆえに、私たちはこの本、神が書かれた唯一の本、聖書を尊重すべきであると思うのです。

そして神はあらゆる方法をもって、この聖書こそ神が書かれた唯一の本であることを証明し、確証し、推薦しています。聖書に関して、過去あらゆる非難、攻撃がありました。科学的におかしい、歴史の事実と違う記述だ、などの非難があったのですが、どれもこれも皆すでに決着がついています。結局聖書が正しかったことが明らかになっているのです。

人の語ったことばと神が語られたことばの違いは何でしょうか？その大きな違いは、人のことばは、将来成就するかどうかは分からない、ということ、しかし神のことばは、一度語られたなら必ず成就する、ということです。その違いがあります。

人のことばは、それがどれほど有名な人でも偉人でも語ったことばがその通りに実現するとはかぎりません。例としては、たとえば有名なノストラダムスの予言があります。1999年7の月に空から恐怖の大王がやってくる、とのことで、皆心配したのですが、結局何も起こりませんでした。お詫びのために、ノストラダムスの本を日本で書いた著者は頭を剃ったそうです。ノストラダムスは有名でも、やはり人に過ぎません。やはり未来を予測しても限界があるのでしょう。自分が死んだ後、何百年も先のことまで責任を持ち得なかったのでしょう。

しかしこの件に関して、聖書は違います。また、聖書を書かれた神は違うのです。何を言っているのか？と言うと、神は「ことばは神である」と言われた神のことば、聖書を大事にしており、また、聖書の中で、御自分で語られたことばに

ことばは神である

関しては一字一句まで、責任を持たれるのです。たとえ何千年前に書かれたことばでも、今でも責任を持たれるのです。イエス・キリスト御自身もそのことばに関してこのように語っています。

〔聖書箇所〕マタイの福音書5:18

5:18 まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

ここで言われている律法とは、聖書のことばのことです。神のことばは決して廢れることはない、逆に全てのことばが成就する、とそうキリストは語られるのです。人間の予言レベルだと10予言したうちの一つでも当たれば大当たりですが、聖書のレベル、キリストの言われるレベルはそのようなものではありません。逆にすべてが成就する、それらの聖書のことばの一つのことば、否その一文字、否その一文字の一点一画さえ、成就しないことはない、とはっきりと語られているのです。神がその語られたことば、すなわち聖書のことばに関して、いかに責任を持つようとしておられるか、それらの全てのことばを守るためにいかに力を尽くし、情熱を傾けておられるか、ご理解いただけるでしょうか。

そして聖書を紐解くなら、聖書の記述とは、神が前もって語り、そしてそのことばが後にその通りに成就する、という記述の連続であることを知ります。しかもそれらの語られたことばの対象はフィクションでも物語でもなく、現実の歴史であり、現実起きた事柄なのです。例を挙げましょう。聖書の神は紀元前7世紀頃、預言者エレミヤを通して当時の世界帝国バビロニア帝国の首都であるバビロンに関してこう述べられました。

〔聖書箇所〕エレミヤ書51:37,41

51:37 バビロンは石くれの山となり、ジャッカルの住みかとなり、恐怖、あざけりとなる。

51:41 ああ、バビロンは攻め取られ、全地の榮譽と間で恐怖となった。

このことばが述べられた状況を考えるなら、このバビロンはその当時の世界を支配していた

バビロニア帝国のまさに首都だったのです。バビロンの榮華と言われたその繁榮の真最中にこのように、その滅亡に関する神のことばが語られたのです。今で言えば、世界一の帝国アメリカのニューヨークの都市の繁榮の真只中に、その破滅を預言したようなものです。しかしこの神のことばはその後、成就しました。エレミヤが預言したその数十年後、紀元前539年にバビロンはペルシャの王により占領され、国は滅びたのです。その結果、上記のことば、「**バビロンは攻め取られ、全地の榮譽となっていた者は捕えられた。**」とのことばは、正確に成就しました。さて、今現在バビロンの地はどうなっているのでしょうか？かつてのバビロンの地は今のイラク国にあります。そしてその国のかつてバビロンのあった地は、誰も住まない廢墟となっています。そして、「**バビロンは石くれの山となり、ジャッカルの住みかとなり**」とのことばは、まさに成就しているのです。

聖書の神が語られることばは、このようなレベルで成就するのです。そしてこれは、バビロンだけではありません。聖書の中にはこのように神が前もって語り、そしてその後、そのことばのように成就する、という例が沢山あるのです。それはギリシャ、メド・ペルシャ、エジプトなど、世界的な国々に関するものであったり、当時の王達に関するものだったりします。そしてそれらの前もって語られた聖書のことば、預言はことごとく成就するようになります。

これらの聖書のことばの成就を見て理解できることは、人の歴史は人が作っているようで、そうではない、ということです。歴史を真に支配しているのは、目に見えない神御自身であることを私たちは聖書の記述を通して知ります。そしてそれは、世界のみならず、私たち個人の生活に関しても同じです。私たちの体を、命を、また生活を真に支え、守られる方、それはじつは目に見えない神御自身である、それを知りましょう。



バビロンの遺跡

高ぶりを打ち砕く:進化論の誤り

【聖書箇所】Ⅱコリント人への手紙10:5

10:5 私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆ら
って立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかり
ごとをとりこにしてキリストに服従させ、

本日は「進化論の誤り」として、このことを見たいと思います。人はどこから誕生したのか？その問題に関して聖書は「神が人を創造した」と述べます。しかし日本においては、学校で進化論が教えられており、人は猿から進化した、と教えられます。いったいどちらが正しいのか？本日はこの事柄を扱いたいと思います。アメリカにおいては、人間の起源に関して進化論のみが採用されているわけではありません。神が人間を創造した、という創造論の教科書を採択している学校も多いのです。進化論に関して、知っておいたほうが良いことがあります。それはダーウィンが当初提唱した進化論の理論は現在では皆、破綻しており、まともに彼の理論をそのまま採用している進化論の学者はいない、ということです。そしてもう一つは、進化論の学説、証明の方法には誤り、ウソが多いということです。

【人と猿との中間生物:類人猿の誤り】

進化論の理論の骨子は、「単純な生物から複雑な生物に進化した」というものです。そしてその理論を人間に当てはめ、最も高等な人間は、その下に位置する猿から徐々に進化した、と述べます。さて、このように進化論は述べており、理論を説いているのですが、一つ彼らの側で困ったことがあります。人間と猿との間の中間種やら、中間生物などはどこにも存在しない、という事実です。理論と実際が合致しないのです。

それで世界中で、彼らの血まなこの発掘作業が始まりました。何としても理論通り、猿から人間へと進化するその途中の形態の生物、いわゆる類人猿を発掘しようという努力です。その結果いくつかの「歴史的発見」が行われ、いくつかの「貴重な類人猿の発掘」が行われたことになっています。教科書にも書いてあるアウストラロピテクス、ジャワ原人、北京原人、ネアンデルタール人、クロマニヨン人などです。

さて、これらの人間と猿との中間生物、類人

猿である、と言われてきた発掘、また、進化論を確証すると言われた発見が皆、誤りや偽りに過ぎない、ということをご存知でしょうか？

「エーッ？」と思うかもしれませんが、そうなのです。アウストラロピテクスは、これまでサルとヒトとの中間である「猿人」と主張されてきましたが、今ではサルやゴリラに似た動物の一種で、昔に絶滅したものの、ということが複数の人類学者の調べで分かっています。最近、リチャード・リーキー氏の調べでその耳の構造をCTスキャンで調べた結果、この動物が習慣的に直立していないことが判明しました。アウストラロピテクスは今では四足で歩いていたサル的一种としか見なされていません。

ジャワ原人も実体のないものであることが分かっています。1891年、進化論に感化された若者ユージン・デュボアが発見したとされていますが、その証拠の骨は頭蓋骨と歯と大腿骨の3つだけでした。ユージンは大得意のようでしたが、当時の一流の解剖学者ルドルフ・バーク博士やW. H. バロウ博士らに強く批判されていました。なぜなら頭蓋骨は大腿骨から14メートルも離れたところで発見されていて、歯も頭蓋骨から数メートルも離れたところで見つかったからです。これらの骨が同一の生物のものという証拠は何もありません。しかもものにその地層をもう一度よく調べてみると、同じ地層から今と同じヒトの遺骨が見つかりました。これではジャワ原人をヒトの先祖と呼ぶことはできないでしょう。スペース的にあまり長くは書けないので、ここまでにします。続きは次回とさせていただきます。本日のまとめは以下です。進化論とは、理論が先行しており、その理論に事実が合わないということ、理論に合わせてそれらしい骨を無理矢理、「猿から人へ進化する途上の類人猿の発掘」として発表しますが、後になってそんなものではないことが判明することになります。進化論とは、そんな歴史だということが本日の結論です。



猿の骨だった「猿人」アウストラロピテクス

箴言から学ぼう！：神さまは教育されるお方

[聖書箇所]箴言5:23

5:23 彼は懲らしめがないために死に、その愚かさが大いいためにあやまちを犯す。

私もそのひとりですが、多くの人はご家庭や学校や社会において教育を受けていると思います。ですから、大人になって「教育」なんていうことばを聞いたところで「もう、それは過去に済んでいるから」と思う方が多いでしょう。正直、私もそんな風に思っていました。でも、聖書を少しずつ読むようになってから、ひよつとしたらそれは違うかも、と思うようになりました。上記のことばは、まさにそのことを語っているかなあと思いましたので、今回取り上げてみました。よろしければ、少しずつ見ていきましょう。

「**彼**」とは、その前の節を読むと分かるのですが、「悪者」のことを言われています。つまり彼、悪い人は、「**懲らしめ**」がないために死ぬ、ということを行っているのです。ちなみにKJV訳で「**懲らしめ**」のところは、「教育」と訳されています。そんな風に聞くと、「ええっ？それじゃあ、学校へ行けない子どもたちは死んでしまうの？」と思うかもしれませんが、それはそうではありませんので、大丈夫ですよ。ここに書かれている「教育」とは、この世のもの、たとえば英語とか数学とか国語とか、そういうことを言っているわけではありません。もちろんそれらも大事かもしれませんが、でも、聖書で語っている「教育」とは、「神の教育」のことを言っています。そう、神さまは私たちのことを教育されるお方なのであります。そして私たちが神さまの教育をきちんと受けることによって、「**死**」（聖書：滅び）や「**あやまち**」（KJV訳：墮落）から守られるのです。

たとえばあなたが将来、競泳のアスリートになりたいと思って水泳をはじめることにしたとします。その時に普通なら、インストラクターから指導を受けると思います。でも、自己流で進めていったらどうなるのでしょうか？ろくに泳げないのに、突然海で泳ごうとしても、あたふたしたり、そればかりではなく、溺れてしまうのが関の山ではないでしょうか？そしてこのま

までは競泳の選手になるのは難しいと判断して、誰かから教えていただこうと思いますよね？

競泳の選手を目指す人が水泳を教える専門の人が必要なと同じように、私たちがあやまちから守られて正しく歩むためには、霊的な教育者が必要になります。ちなみに霊的な教育者とは誰のことだと思いますか？ご両親ですか？学校の先生ですか？それとも友人や職場の上司の方ですか？残念ですが、どれも該当しません。なぜか？と言うと、人には必ず誤りや間違いがあるからです。しかも霊的な事柄なので、要は心に関することなので、私たち一人一人の思いや感情を隅々までを知っている方でないと、できないですよ？そのように考えていくと、だんだんと結論が見えてきませんか？人では無理、となると・・・私たちの霊的な教育をしてくださるのは、目には見えませんが、全知全能の天の父なる神さま（イエス・キリスト）しかおりませんよね？全てにおいて正しく、全てのことをご存知で、誤りや間違いのないこのお方から教育を受けていくのなら、徐々にではありますが、歩みを正しくしていくことができるのです。

もし、「神さまの教育」に少しでも興味をお持ちでしたら、祈って求めてみてください。神さまは、個々の人に合ったもっとも良い方法で教育してくださるので、信じて求めていく人にはそのことが顕著に実現していきますので、ぜひおすすめいたします。「教育」なので、やさしいことばかりではなく、時には叱責とか厳しいこともあるかもしれませんが、しかしどれもこれも素直に受け入れていくときに、正しい方向へとひとつひとつ是正されていきます。「**あやまち**」（KJV訳：墮落）からも守られます。そして生涯にわたってきちんと全うするなら、「天国」が約束されますので、よろしければ実践してみてください。もちろんすべての面でお一人一人の自由意志を尊重される神さまではありますが、しかし反対に「神さまの教育」を受けない、というときに、霊的に墮落してしまったり、その成れの果てには、「死」（死後の滅び、永遠の刑罰）に渡されてしまう可能性がありますので、気を付けていきたいと思えます。

聖書の視点から「死後」について考える:永遠の苦しみのことを思うと…

〔聖書箇所〕ダニエル書12:2

12:2 地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。

冒頭の聖書のことばは、第1号で「死後の世界」に関して話をした時に引用したものと同じです。なので「ええっ、また同じことを言うの?」と思われるかもしれませんが、でも、最近私なりに少し感じるがありましたので、そのことも踏まえながら話をさせていただきたいと思っておりますので、よろしければお読みいただけたら、と思います。

私事ではありますが、先日体調を崩しました。二年前も同じような症状があらわれて、その時も辛い思いをしましたが、今回もかなり苦しい思いを何日かにわたって体験しました。体調が悪くなる、なんてことは珍しいことでもなんでもないと思いますが、しかし私は自分の身に起きた出来事を通してこんな風に思いました。

「数日ですら、とても辛く、苦しく思うのに、これがもし、永遠に続くのだったら・・・」と。人は大なり小なり、痛いとか苦しいとか辛い、なんてことを経験すると思うのですが、そんな時に、「この状態が早く終わらないかなあ」とか「何とか逃れられないものか?」と思いますよね?そう、辛かったり、苦しかったりする状況から一刻も早く抜け出したい!という風に誰もが思うと思います。そしてその状態が少しでもおさまったり、楽になったり、無事に解決されたりしたときには、ホッとしますよね?しかし、死後の世界において、もし、「永遠の忌み」の場所に入ってしまった場合に、そこから抜け出すことはどうやらできないようです。「永遠」とはつきり書かれているからです。そして、「永遠の忌み」とは具体的にどんな所なのか?それについて黙示録のことばを見てみたいと思います。

〔聖書箇所〕ヨハネの黙示録14:10,11

14:10 そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖な

る御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。

14:11 そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。

上記に書かれていますように、「永遠の忌み」とは、「火と硫黄とで苦しめられる」場所だということが分かります。また、「火と硫黄」について、ルカの福音書の金持ちとラザロの話から見てみましょう。

〔聖書箇所〕ルカの福音書16:23,24

16:23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。

16:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』

「ハデス」とは地獄のことです。そしてそこは、「私の舌を冷やすように」とか「この炎の中で、苦しくてたまりません」とありますように、炎が燃えさかっている所、つまりとても熱い場所なのでしょう。しかも「舌」までが熱い、と思うほどに苦しいのでしょうか?そういう場所に行きたいと思いませんか?でも、第2号でもチラッと話しましたように、イエス・キリストを信じることなく、受け入れることなく、それで生涯を終えてしまうときに、「永遠の忌み」の場所にそのまま連れて行かれてしまう可能性がありますので、もし、そこから何とか逃れていかなければ・・・と思われましたら、ぜひご一考いただけると幸いです。たしかにこの世で生活していると様々なことはありますし、時として苦しいとか辛いとか、そんな風を感じることもあるかもしれませんが、しかし死後の永遠の苦しみだけは何が何でも逃れていきたいと思えます。イエス・キリストは今日もお一人一人を救いへと招いておられます。

キリストを信じた体験談:神さまからなぐさめを得た(シャローム)

主の打ち傷によって私たちの罪が贖われることを、みことばは語っています。単にことばだけで知るのではなく体験的に知ることによって、深く主を愛することができると思います。私たちは天地万物を創造された神さまによって造られました。神さまを信じない者は自分の罪の中で死ぬと書かれている以上、神さまの言われることがどこまでも正しく尊重すべきことだからです。私たちの生まれつきの性質は神さまと敵対関係にあり、神さまを愛し受け入れることが、愚かに見えます。神さまに頼るつもりでいても、自分の力(肉の力)にしがみつき、なかなか神さまに重荷を下ろせない状態であったりします。

私自身がそのような一人でしたので、ここに証したいと思います。肉体が病んで苦しい時は一日も早く癒されたいと誰でも思いますが、しかし霊的に病んでいる状態は、神さまに触れないとなかなか分からなかったりします。神さまの元に立ち返って初めて自分自身の姿が見えてくるのです。イエスさまは言われました。生きている人に関して「死人」と。それは、肉体は生きていても神様を信じない人は、自分の罪の中に死んでいる、その状態を指して言っているのです。生きてはいても、死んだも同様なことを言っているのです。

人間的にどうしてもなく辛く、明らかに心に傷を受けたり、弱さを覚えたりする時、真の癒しは神さまから来るのです。神さまを信じ、神さまに祈り求めるときに、ちょうど良い時に不思議な方法で元気をつけてくださるのです。私がこの頃教えられるのは、以下のアザゼル(スケープゴート

ト)の箇所です。

“レビ記16:10アザゼルのためのくじが当たったやぎは、主の前に生きてままで立たせておかなければならない。これは、それによって贖いをするために、アザゼルとして荒野に放つためである。”

この聖書の箇所から分かるようにイスラエルには昔、アザゼル(スケープゴート)の習慣があったことが聖書には記されています。このやぎは、やぎ自身には何も罪が無いのにもかかわらず、他の人々の罪を負って、野に追いやられ、仲間から追い出され、荒野に放たれました。このやぎの姿は他でもない、私たちの罪を負い、人々からのけものにされ、何の罪も犯していないのに、十字架で死に、人々の罪を負うスケープゴートとなったキリストの型です。

このことを知って私の息子は力づけられたようです。礼拝後、息子が共に月刊バイブルを駅近辺のマンションに配布しましたが、これもとても良かったと息子が喜んでいました。このように息子が感謝して喜んでいて姿を見て、私自身一気に疲れも吹っ飛び心がうれしくなりました。

神さまはすばらしく、神さまを信じる者は、弱っていてもちょうど良い時に引き上げてくださること、真理により力を与えてくださることを知りました。感謝です。

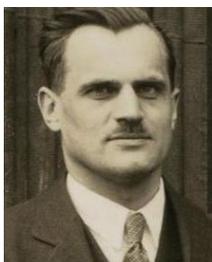


スケープゴート

聖書に関する偉人のことば:コンプトンのことば／お知らせコーナー

<聖書と偉人>

アーサー・ホリー・コンプトン(ノーベル賞受賞者)



秩序正しく広がっている宇宙は、『初めに神が天と地とを創造した』(聖書の冒頭のことば)という、もっとも荘厳なことばの真実さを証明する。

<お知らせコーナー>

●月刊バイブル無料プレゼント！(限定5名様)

月刊バイブルお読みになっていかがでしたか？もし興味があり、購読をご希望の方はお申し込みください。尚、期間限定サービスとして、申し込み順で5名様までに、本紙、送料共に「1年間無料！」で送付することにします。ご希望の方は以下を記載の上、mail:truth216@nifty.com もしくは fax:020-4623-5255 もしくは tel:042-364-2327 へご連絡ください。先着5名様に郵送でお送りします。

「月刊バイブル無料サービスに申し込みます。」

住所:

名前:

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日/午前 10:30-12:30,午後 14:00-16:00

場所:東京都、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館 (tel:042-360-3311)

1Fのエレベーター脇の部屋表示板で、「レムナントキリスト教会」の部屋を確認ください。

どなたでも来会歓迎、入場無料です。tel:042-364-2327, mail:truth216@nifty.com

★教会のHPもあります。

ご興味のある方は、“Yahoo! Japan”で、「府中 レムナントキリスト教会」で検索ください。

尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ&ミルトス

<http://remnantnotudoi.jimdo.com/>

☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/>

●第38回黙示録セミナー by エレミヤ

黙示録、ダニエル書など終末に関するトピックを解説するセミナーです。

北海道から、広島から熱心なクリスチャンが参加しています。

場所:府中グリーンプラザ本館第5会議室 (7F)

日時:2015年1月11日(日) 18:00-20:30

費用:入場無料、但しテキスト代1,000円(当日徴収)

定員:20名(先着申込順。満員次第締め切り)

主催:レムナントキリスト教会 (tel:042-364-2327)

申し込み:メールもしくはfaxで、「名前、住所」を記載の上、「セミナー参加希望」とお申し込みください。fax:020-4623-5255,mail:truth216@nifty.com